慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『平家継図并平家一部歌』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1991
Jtitle	三田國文 No.15 (1991. 12) ,p.26- 36
JaLC DOI	10.14991/002.19911200-0026
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19911200-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『平家継図并平家一部歌』解題・翻刻

石川　透

解題

ここに紹介する『平家継図并平家一部歌』は、「平家之継図」「平家一部之引歌」「〔釈教歌〕」の三章から成る一冊本である。前二章は、『平家物語』の系図と和歌の抜書である。〔釈教歌〕は、内題はないが、解脱上人・弘法大師等の和歌とその解説である。

最初に、本書において最も丁数が割かれている「平家一部之引歌」について解題を行いたい。最近、櫻井陽子氏「資料紹介神宮文庫蔵「平家物語和歌抜書」」（『軍記と語り物』二十七・一九九一年三月）・「「平家物語」の受容の様相――神宮文庫蔵「平家物語和歌抜書」を通して――」（『国文』七十五・一九九一年七月）によって、『平家物語』の和歌抜書が紹介された。その中で、江戸期の写本七本について触れられ、延宝六（一六七八）年写の神宮文庫蔵本が翻刻されている。櫻井氏によれば『平家物語』の底本としては、七本のうち、五本が流布本、一本が中院本、残りの一本が「源平盛衰記」であるという。

ここに翻刻した「平家一部之引歌」は、筆写時期において、そらら七本を遡りうるものであり、内容的にも使用底本に問題がある本であるといえよう。まず目につくのが、一二巻の巻数が記されていながら、その位置が、『平家物語』諸本と異なっていること、作者名の宛字が甚だしいことである。このように記されている『平家物語』の存在は寡聞にして聞かない。おそらく、筆者の写し誤りと宛字によるのであろう。そして、和歌・作者名を詳しく調べると、誤写と思われる箇所がいくつか見出されるのである。例えば、95番歌第五句は、「盛ケレ」では字足らずである。諸本にあるように「盛ナリケレ」が正しいであろう。

このようにみてくると、本書は誤りの多い写本のように思えてくるが、そうばかりもいえないようなのである。何はともあれ、まず、本書がいかなる系統の『平家物語』を写したものなのか、から考えてみたい。

先にも記したように、本書は一二巻本を写したものである。その巻の位置に問題は残るが、潅頂巻と記されていない以上、元になったものは八坂系ということになる。次に、抜書された

和歌の数をみると、ちょうど百首になる、この数は、一方系流布本の和歌の数に等しい。そこで、本書の和歌と一方系流布本の和歌を較べると、意外にも似ているのである。

本書の和歌番号を使って、流布本の和歌の出入りを箇条書きしてみると、

(1) 18 19の間に、流布本には「しらなみの」「おもひやれ」の二首がある。
(2) 46の位置は、流布本では43 44の間である。
(3) 47 48は流布本にはない。
(4) 56の位置は、流布本では54 55の間である。
(5) 78 79の間に、流布本には、100の歌と「いかにせん」の二首が入る。
(6) 91は流布本にはない。

となる。流布本にあって本書にない歌が三首、流布本になく本書にある歌が三首あることになる。この程度の出入りならば、本書は一方系流布本とみてよいようにも見える。しかし、それでは、巻立てから判断される八坂系という答えと矛盾してしまう。そこで、和歌三首の出入りを中心に検討してみよう。

(1)の流布本の二首は、本書の欠脱のようにもみえる。八坂系の百二十句本等諸本にもこの二首が入っていることは、欠脱説を裏付けるものといえよう。しかし、八坂系でも、両足院本、如白本等にはこの二首が欠けている。写す際の欠脱ということもありうるが、この二首を含まない八坂系の写本がある以上、本書はその系統の本をうつしたことになろう。

(2)の46の位置が異なっている理由はわからないが、47 48という他本にない歌が次にきていることと何か関係があるのだろうか。

(3)の47 48の歌は、平家物語諸本には見出せない歌である。48の歌は、『太平記』巻二十一「塩治判官讒死事」の、源三位頼政の歌、

五十雨ニ沢辺ノ真薦水越テ何菖蒲ト引ゾ頼フ（『日本古典文学大系』）

に、第二・三・五句が違いながらも似た歌である。作者名も頼政で一致している。そのようにみると、47の歌も、同じく『太平記』で、「五十雨に」の歌の少し後にある、薬師寺次郎左衛門公義の歌、

返スサヘ手ヤフレケント思ニゾ我文ナガラ打モ置レズ

に似た面がある。作者名も違い、第一句から五句まですべて違っているが、「返ス」「手ヤフレケン」等同一語句が使用されているのである。47の第一句の「玉章ヲ」は、46の第一句と同じであることも気にかかる。前にみたように46の位置は、本来的には43 44の間であった。あるいは、46をこの位置にしたのは、同類歌の47を導き出すためではなかったか。その47は、『太平記』で48と関係ありそうである。『平家物語』諸本にはこのような写本は見出せないことから、本書の書写者が、(2)(3)を作為的に行ったのかもしれない。もちろん、このような連想で記された『平家物語』を、そのまま写したことも可能性としては考えうる。

(4)は、『平家物語』では、56 55の順番で行われる歌のやり取りである。何らかの手違いで順番が逆になったのであろうか。

(5)の流布本の二首のうち、100の歌は本章の末尾に記されてい

るが、「いかにせん」の歌は欠脱している。何らかの誤りがあって、100の欠脱のみ気付いて巻末に入れたのであろうか。これも、元の『平家物語』に既に誤脱があったのか、抜書筆者が落したのかは不明である。欠脱の状態は(1)に似ているが、こちらは両足院本・如白本等に掲載されている。

(6)の91は一方流諸本には見出せず、八坂系諸本に見られる歌である。鎌倉本のこの歌を記すと、

白波ノ打驚ス岩ノ上ニネイラテ松ノ幾世経ヌラム（『鎌倉本平家物語』）

となる。第三句以下大分異なっているが、元になったのはこの歌とみてよいであろう。このことは、本書の元本が八坂系であることをさらに裏付けることになる。それでは、八坂系諸本のうち、どの本に最も近いのであろうか。全くの同一歌は見出せないが、如白本に、

白波ノ打驚ス岩ノ上ニ根入ラテ松ノ元世経（无歟）ヌラン（彰考館蔵写本）

とある。八坂系諸本とほぼ一致しているが、第五句に「无歟」と傍書してある。これは、あるいは、91番歌の「ナキ」とあるのと繋がるかもしれない。

以上のようにみてくると、本書の流布本との差異は、そのいくつかが八坂系の本文の特徴を示しているのである。ただし、八坂系諸本の和歌の数は、本書より多いのが普通だ。歌の数や、内容からすると本書は一方系流布本に近い面もある。相矛盾している現象のようにみえるが、一方系流布本に近い本文をもつ八坂系本が存在すれば、本書の祖本はその系統であろうと想像がつく。実は、そのような本は実在し、先に少し触れた、両足院本・如白本等の系統諸本（山下宏明氏『平家物語の生成』によれば、八坂流第四類本）がその条件を満たすのである。

それでは、本書が八坂系の中でも両足院・如白本に近いことを示す例をいくつかみてみよう。58番歌第三句「打詠メ」は、一方系諸本・八坂系諸本のほとんどが、「カヘリミテ」である。ところが、両足院・如白・米沢本等は、58番歌と同じ「打詠メ」である。また、61番第五句「思出ラン」は、一方系・八坂系諸本では「思ひしるらん」「わすれ給はじ」等であるのに対して、両足院・如白・米沢本は61番歌と同句である。

『平家物語』八坂流は、主に室町期に流行し、写本も室町期から江戸初期の筆写が多いことで知られている。本書の筆写時期もほぼそれと同時期と思われることから、一方流本文に近い八坂流『平家物語』から本書が作られたとみてよいのではなかろうか。

本文を精査すると、先に述べたように、一方流・八坂流の両者とも異なる部分もあり、それが単なる誤写なのかどうか、問題は残るが、一応このように結論付けたいと思う。

順序が逆になったが、「平家之継図」について略記する。『平家物語』の系図は、単行本としても『平家物語系図』『平氏系図』等があり、『平氏系図』は、『続群書類従』にも入っている。本書の基になったのもこのような単行本という可能性もあるが、八坂系『平家物語』にも文禄本（筑波大学図書館蔵写本）等のように、系図をともなった写本が存在することから、本書の系図も、『平家物語』付載の系図を記したものではないかと思われ

る。

本書巻末の「〔釈教歌〕」も問題が多い。順番に典拠等をみていくと、最初の「吾行テ」の歌は、『玉葉和歌集』巻第二十、二七三三番歌にあり、「我ヲ知レ」の歌は、『続古今和歌集』巻第七、六八七番歌にある。両者とも歌に異なる点がある。しかし、より近いかたちをとるのは、『沙石集』巻一「神明慈悲ト知恵ト有人ヲ貴給事」の一節で、

解脱房上人、笠置ニ般若臺ト名付テ、閑居ノ地ヲトテ、明神ヲ請ジ奉、給ケレバ、童子ノ形ニテ、上人［ノ］頸ニ乗テ渡ラセ給ケリ。サテ御詠有ケリ。

ワレユカン行キテ護ン般若臺　釋迦ノ御法ノアラン限ハ

或時般若臺ノ道場ノ虚空ニ、御聲バカリシテ、我ヲシレ釋迦牟尼佛ノ世ニ出テ　サヤケキ月ノ世ヲ照ストハ（『日本古典文学大系』）

とあるように、二首ともに登場しているのである。

「皮生テ」の歌は、典拠未詳である。

「今更ニ」の歌は、『歌仙落書』一〇〇番歌に、

二条院讃岐　四首　頼政朝臣女

風体えむなるを先として、いとほしきさまなり、女のうたかくぞあらめとあはれにも侍るかな、家の風たえず申さむ事もおろかなり、ちちの朝臣よりは、えんなるかたは立ちまさりてや、末の世には出来がたくなむ、九月ばかりね覚がちなる床ちかく、むしの声声かれがれに聞ゆる暁がたに、夢さめたる心地こそすれ

始思はで後思ふ恋といふことを

今更におもふもいふもたのまれずこれも心のかはると思へば

とある歌と同一のようだが、作者も作歌事情も大きく隔たっている。

「法性ノ」の歌は、『新勅撰和歌集』巻第十、五七四番歌に、

土左国室戸といふところにて　弘法大師

法性のむろとといへどわがすめばうゐの浪風よせぬ日ぞなき

とある。やはり和歌に異なる点もあるが、作者・作歌事情は同じようだ。

「霊山ノ」の歌は『拾遺和歌集』巻第二十、一三四八番歌に、

南天竺より東大寺供養にあひに、菩提がなぎさにきつきたりける時、よめる

霊山の釈迦のみまえにちぎりてし真如くちせずあひ見つるかな

とあるのと同一歌であろう。この歌は、『袋草紙』等の歌学書、『沙石集』等の説話集、如白本・米沢本・延慶本等の『平家物語』、『太平記』にも記されているが、本歌と全く同一の本文を有する本は見当たらない。

「世ヲ救フ」の歌は、『沙石集』巻二、『地蔵菩薩霊験記』巻六にみられる。後者の歌のみ記すと、

世ヲ救心ハ我モ有物ヲ権ノ姿ハ免ニモ角ニモ（『古典文庫』）

となる。歌に小異があり、作歌事情も異なるが、作者を地蔵と

する点では一致している。

以上のように、七首中『沙石集』と重なる歌が四首あり、その類の説話集から抜き出したと思われるが、歌には相違点があり、判然としない和歌もみられる。

最後に、「平家一部之引歌」に関して付言すれば、櫻井氏紹介の七本の『和歌抜書』以外に、やはり架蔵の写本『平家物語書中歌』がある。この書は、『平家物語』流布本を写したようだが、途中に『源平盛衰記』の歌が入っている。写しは明治二十三年であり、明治になってもこのような和歌抜書が写されたことがわかる。

ここに、『平家継図并平家一部歌』の書誌を記す。

所蔵、架蔵。
形態、袋綴、一冊。〔室町後期〕写。
寸法、竪一七・〇糎、横一五・一糎。
表紙、後補縹色表紙。
外題、ナシ。ただし、元の外題かと思われる切紙があり「平家継図并平家一部歌」と墨書。
内題、「平家之継図」（1オ）、「平家一部之引歌」（3オ）
料紙、斐楮交漉紙。
丁数、一〇丁。
行数、和歌部分は半葉一四行。
字高、約一五糎。
朱引、系図部分の傍線は朱。
奥書、ナシ。
印記、ナシ。

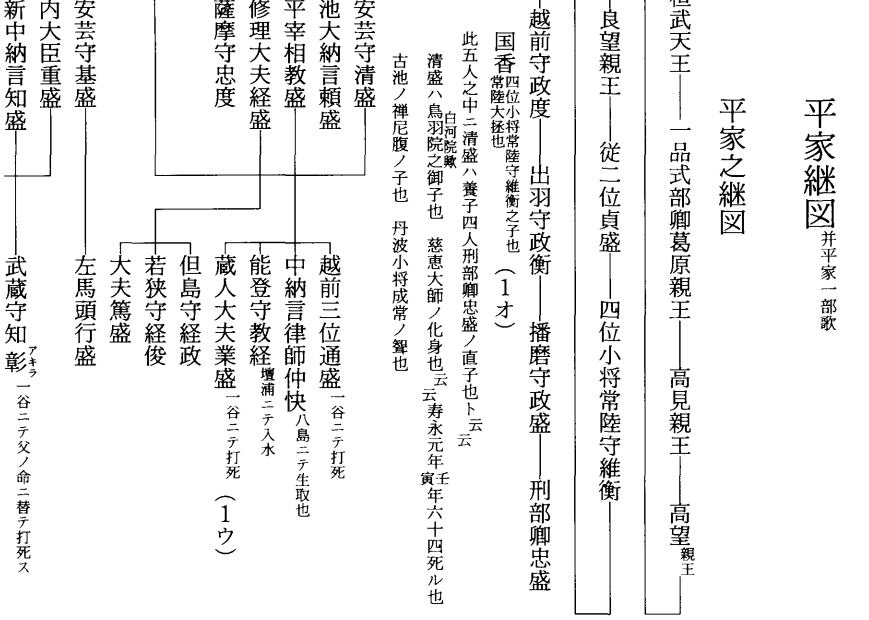
以下に『平家継図并平家一部歌』の全文を翻刻する。翻刻に際して、次の方針をとった。

1　本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字の旧字体はおおむね現行書体に改めた。
2　底本の丁数は、その頁の末尾に（　）をもって記した。
3　巻末の釈教歌には内題がない。前と区別するために、〔釈教歌〕と私に内題を付した。
4　私に「平家一部之引歌」の歌番号を算用数字にて記した。

（いしかわ　とおる）

平家継図 并平家一部歌

平家之継図



平家一部之引歌

一巻 殿上暗打

1 在明ノ月モ明石ノ浦風ニ　忠盛
波斗コソヨルト見ヘシカ

2 雲井ヨリ忠盛来ル月ナレハ　女房
朦気ニタニヲカシトソ思フ

3 崩出ル枯ルモ同シ野辺ノ草　妓王
何カ秋ニアワテハツヘキ

三条之姫　4浮キ臥ニ流モヤラテ川竹ノ　大宮　厳島御幸
世ニタメシナキ名ヲヤ流サン
5思キヤ浮身ナカラニ廻来テ　同　高房
同シ雲井ノ月ヲ見ントハ
鹿之谷　6桜花賀茂ノ川風ウラムナヨ　神歌　鷹居
チルヲハエコメ留メサリケン
御輿振　7深山木ノ其梢トモ見ヘサリシ　頼政
桜ラハ花ニアラワレニケリ
二巻　少将流　8陸奥ノアコヤノ松ニ木隠テ　成常
出ヘキ月モ出モヤラネハ
山門滅亡　9祈来シ吾立杣ノ引カヘテ　僧
祝（ノット）　10終ニカク背ハテヌル世間ヲ　安頼　宮最后（ゴ）
人ナキ峰トナリヤハテナム
トク捨サリシ事ソクヤシキ
率都婆流　11千破屋経神ニ祈ノ重ケケレハ　夢想
ナトカ都ヘカヘスサルヘキ
12サツマ方奥ノ小島ニ我アリテ　同　鵺
親ニハ告ヨ八重ノ塩風
13思ヒヤレシハシ思ノ旅タニモ　同
尚古郷ハコヒシキ物ヲ　（3ウ）
三巻　成常帰洛　14古郷ノ花ノ物云世ナリセハ　古歌
イカニ昔ノ事ヲ問マシ
少将都落　15古郷ノ軒ノ板間ノ苔莚　安頼
思シ程ハモラヌ月哉
四巻
16雲井ヨリ落来ル滝ノ白糸ニ　幸賢僧正
契ヲ結フ事ソ喜シキ
17立帰名残モ有ノ浦ナレハ　少将
神モ恵ヲカクル白波
18千年経君カヨハイヲ藤波ノ　大納言
松ノ枝ニモカヽリヌル哉
19コヒシクハ来テモ見ヨカシ身ニソフル　伊豆守（豆守）
影ヲハイカニ離ヤルヘキ
20山法師ヲリ延衣ウスクシテ　落書
ハジヲハエコソカクサヽリケレ　（4オ）
21ヲリ延ヲ一切モヱヌ我ラサヘ　同
ウスハジヲカクス数ニ入哉
22伊勢武者ハミナ火ヲトシノヨロイキテ　伊豆守
宇治ノアジロニカヽリヌル哉
23埋木ノ花咲事ハ無レトモ　頼正
身ノナルハテソ悲カリケル
24人知レヌ大得山ノ々守ハ　同
木カクレテノミ月ヲ見ル哉
25登ヘキ便ナキノ身ハ木ノ下ニ　同
椎ヲ捨テ世ヲ渡リケリ（ママ）
26杜鵑名ヲモ雲井ニアクル哉　同
弓ハリ月ノイルニ任テ
27五月暗名ヲ顕セル今宵哉　同
タソカレ時モ過ヌト思ヘハ　（4ウ）

28百年ヲ四返モマテニ過来シヲ
小田木ノ里ノアレヤハテナン
29咲出ル花ノ都ヲ打捨テ　蔵人
風吹原ノ末ソアヤウキ
30待宵ノ更行鐘ノ声聞ケハ　侍従
月見
アカヌ別ノ鳥ハ物カワ
31物カワト公カ云イケン鳥ノ音モ
今朝シモナトカ悲シカルラン
32待ハコソ更行鐘モツラカラメ
アカヌ別ノ鳥ノ音ソウキ
33東路ノ草葉ヲ分ン袖ヨリモ　宮原女房
富士川合戦
立ヌ袂ノ露ソコボル、
34別路ヲ何カ歎ン迷行　忠度
関モ昔ノアトヲ知ルヘニ
35都ナル宗盛イカニサワクラン（思ヘハトモアリ）　落書
柱ト憑助（タノム）ヲヲトシテ
五巻
36富士川ノ瀬々ノ岩越ス波ヨリモ　同
早クモ落ル伊勢ヘイジ哉
37富士川ニヨロイハ捨ツ墨染ノ　同
衣忠清後ノ世ノタメ
38忠清ハ二毛ノ馬ニソ乗テ知ル　花桜院
上総シリガイカケテ甲斐ナシ
39キク度ニメツラシケレハ時鳥　僧正陽院
何モ初音ノ心地コソスレ
六巻
40常ニ見シ君カ御幸ヲ今日問ヘハ　朝賢法印
帰ラヌ旅ト聞ソカナシキ
41雲ノ上行スヱ遠ク見シ月ノ　女房
光消ヌト聞ヲ（ヒ）悲キ
42忍レト色ニ出ニケリ我カ恋ハ　正聖
物ヤ思フト人ノ問マテ
43思キヤ心ハソラニ陸奥ノ　冷泉大納言
千家ノ塩竈近キカイナシ
44イモガ子ハ早ハウ程ニナリニ鬼　白川院
忠盛取テ養ニセヨ
45夜鳴スト忠盛立ヨ末ノ代ニ　同
清ク盛ル事モコソアレ
46玉章ヲ今ハ手ニタニ取ラシトヤ　冷泉大納言
サコソ心ニ思ヒスツトモ
47玉章ヲ只其任ニ返スタニ　頼正
手ヤフレケントナツカシキ哉
48五月雨ニ池ノ真薦ノ茂リアイテ　同
何レアヤメト引ソカネヌル
49チハヤ経神ニイノリノ重ケケレハ　経政
ハヤクモ色ニ顕ニケリ
50平カニ花咲宿モ年経レハ　山王神歌
西ヘカタフク月トコソ見レ
51如何ニセン藤ノ末葉ノ枯行ヲ　春日神歌
タ、春ノ日ニ任テヤミン

葵（宮歌引）
祇薗女
七巻　竹生島参詣
連書
法王都落

都落　52瀟ヤ志賀ノ都ハ荒ニシヲ　忠度
昔ナカラノ山桜カナ
鷹居大納言　53飽スシテ別ル、君カ名残ヲハ　御室
後ノ形見ニツ、ミテソ置
常正（経政ノ事歟）　54呉竹ノ掛樋ノ水ハカハルトモ　返歌
猶住飽ヌ宮ノ内カナ
青山獅子丸　55旅（クヒ）衣夜ナ〳〵袖ヲカクシ来テ　常正
思ヘハ吾ハ遠ク行ケン　（6ウ）
56哀也老木若木モ山桜　行慶法印
ヲクレ先立花ハ残ラシ
一門都落　57ハカナシヤ主ハ雲井ニ別ルレハ　教盛
アトハ煙ト立登リケリ
58古郷ヲ焼野カ原ト打詠メ　経盛
末モ煙ノ波路ヲソ行ク

八巻
法王都入　59一声ハ思出テ鳴郭公
ヲイソノ森ノヨハノ昔ヲ
60篭ノ内モ猶浦山シ山柄ノ
身ノホトカクス夕顔ノ宿
名虎　61住ナレシ古キ都ノコヒシサハ
神モ昔ヲ思出ラン
62世ノ間ノ宇佐ニハ神モナキ物ヲ
何祈ルラン心ツクシニ　（7オ）
内大臣（引古歌）　63去トモト思フ心モ虫ノ音モ　重衡
ヨハリハテタル秋ノ暮哉

修理大夫（都）　64月ヲ見シ去年ノ今宵ノ友ノミヤ
都ニサコソ思イ出らん　（神カ）
65恋シトヨ去年ノ今宵ハ夜終　宗盛
チキリシ人ノ思ヒ出らん
66分テ来シ野辺ノ露トモ消（ス）シテ　経政
思ヌ里ノ月ヲ見ル哉

九巻
勢調　67今日迄ハアレハ在カノ我身ニテ
夢ノ内ニモ夢ヲ見ル哉
68人シレヌ其カタ忍心ヲハ
傾ク月ニタクエテソ見ル
二度ノ懸ケ　69武士ノ取伝タル梓弓（弓）　景隆
引テハ人ノ返ス（ヒ）物カハ　（7ウ）
最後　70行（ユ）キ暮テ木ノ下影ヲ宿トセハ　忠度
花ヤ今夜ノ主ナラマシ
小宰相ノ身投　71吾カ恋ハ細谷川ノマルキ橋　通盛
フミカヘサレテヌル、袖哉
72只頼メ細谷川ノ円木橋　正聖門院
踏カヘシテハ落サラメヤハ

十巻
一門頸渡　73何クトモ知ラヌ仰ノ一切衆生　経盛
カキ置クアトノ形見共見ヨ
内裏女房　74泪河憂名ヲ流ス身也トモ　重衡
今一度ノ逢ヨシモ哉
75君故ニ吾モウキ名ヲ流ストモ　女房返
底ノミクズトトモニナリナン

東下　76相事モ露ノ命モモロトモニ　重衡
今宵斗ヤ契ナルラン　（8オ）
女房　77限トテ立別ルレハ露ノ身ノ　返歌
君ヨリ先ニ消ヌヘキ哉
78旅ノ空ハニフノ小屋ノイフセサニ　湯屋侍従
古郷イカニ恋シカルラン
79惜カラヌ命ナレトモ今日迄ニ　重衡
ツレナキカイノ白根ヲモ見ツ
横笛　80剃迄ハ恨シカトモ梓弓　瀧口入道
真ノ道ニ入ソウレシキ
返歌　81ソルトテモ何カ恨ン梓弓　横笛女
引留ムヘキ心ナラネハ
藤渡　82君住ハ爰モ雲井ワヨザノ浦
天ノ橋立都成ケリ
83詠レハヌル、袂ニヤトリケリ
月ヨ雲井ノ物語セヨ　（8ウ）
十一巻
84雲ノ上見シニ替ラヌ月ナレハ
住ニ付テモ物ソ悲シキ
大納言　85吾身コソ明石ノ浦ニ旅セメヤ
同波ニモ宿ル月哉
剣之巻　86八雲立出雲八重垣妻コメテ
八重垣ツクル其八重垣ヲ
腰越　87都ヲハ今日ヲ限ノ関水ニ
又相坂ノ影ヤ移サン

十二巻
88セキカケテ泪ノカ、ル唐衣
後ノカタ形見ニヌキテ置ヌル
89ユキカクル衣モ今ハ何カセン　大納言
今日ヲ限ノ形見ト思ヘハ
90帰リ来ン事ハカタ田ノ引網ノ　平大納言
目ニモタマラヌ我泪哉　（9オ）
91白波ノ打驚ス度コトニ
寝入穴ナキ床ノ上哉
92時鳥花橘ノ香ヲ留テ　女院
鳴ハ昔ノ人ヤ恋キ
93岩根フミ誰カハ問ン楢ノ葉ノ　助嬌
戦クハ鹿ノ渡ル也ケリ
94池水ニ汀ノ桜散シキテ　女院
波ノ花コソ盛ケレ
95思イキヤ深山ノ奥ニ住居シテ　同
雲井ノ月ヲ余所ニ見ントハ
96此比ハイツナラワシキ我カ心　定公
大宮人ノ恋シカルラン
97古モ夢ニ成ニシ事ナレハ　女院
柴ノ編戸モ久シカリケリ　（9ウ）
徳大寺左大臣　98古ハ月ニタトヘシ公ナレハ
今光ナキ深山木ノ里
六道　99倡サラハ泪クラヘン時鳥
吾モ憂世ニ音ヲノミソ鳴

100古郷ハ恋クモナシ旅ノ空　　湯屋侍従
何クモ終ノ住家ナラネハ　　（10オ）

〔釈教歌〕

吾行テ常ニソ守ル般若台尺迦ノ御法ノアラン限リハ
我ヲ知レ尺迦牟尼仏ノ世ニ出テサヤケキ月ノ世ヲ照ス也
山城ノ国笠置寺ニ解脱上人閑居シ玉フケル時春日ノ明神
上人ノ跡ヲ追テ影向アリ読玉フケル也
皮生テ縦六十ハ送ルトモ申ハ過ヌ無碍ノ身ヤ
解脱又笠置ハ交衆ノ寺也トテ又三ケノ原海中山ト云寺ニ
移リ住玉フ也此寺ニ漏出ノ観音御坐ス也此歌ハ中将姫読
玉フト云説アリ何レニ三十一ノ年読ル也
今更ニ思フト云モ頼レヌ人ノ心ノカハルト思ヘハ
此歌ハ観音ノ御詠歌也意ハ解脱ハ住所不定ノ人ナレハ今
海中山ニ住ルヽト云ヘトモ又心ヤカハリ玉ント也
法性ノ室戸ト聞テ吾レスメハ有為ノ波風タヽヌ日モナシ
此ハ土州室戸ニ御住ノ御時弘法読玉フ也
霊山ノ尺迦ノ御前ニ頼メ真如クチセス今日見ツル哉
行基菩薩嵯峨ヘ初テ参給フ時
世ヲ救フ心ハ誰モアルモノヲ外ノ体ハ菟ニモ角ニモ
此ハ洛中ノ貴賤先清水ヘ参帰リニ六ハラノ地蔵ヘ参ケレ
ハ地蔵述懐ノ歌也（10ウ）